

## 「迷い出た羊」 マタイ 18:12-14 木村一充牧師

本日お読み頂いたマタイによる福音書 18 章のたとえ話は、主イエスが語られた譬え話の中でも最も分かりやすい話のひとつです。ある人が百匹の羊を持っていて、その中の一匹が迷い出た時に、他の九十九匹を残しておいて迷い出た一匹の羊を探しに行くというのです。これはたとえ話というより、むしろ現実の話であったかもしれません。実際、イエスの時代のパレスチナではこのようなことがしばしば起こりました。週報の巻頭言にも記したように、パレスチナは西の地中海と東のヨルダン川にはさまれた細長い短冊形、もしくは台形型の地形をしています。ヨルダン川は海面下の低地を流れる川で、世界で一番低い川です。その中央が丘陵地帯となっています。ユダヤの人々は、ここに羊を放牧して育てました。牧草はその丘陵地帯には、まばらにしか生えていません。しかも日本の牧場のように囲いや柵はありませんでした。この丘陵地帯の幅は 3 キロから 5 キロだったと見られます。ですから、羊たちはしばしば草を求めて移動し、羊飼いの目の届かない遠くまで行って、群れから迷い出ることがよくあったのです。とくに東部のヨルダン川に向かう道は急な下り坂が多く、羊たちが谷底に落ちることもありました。そうすると、手の施しようがなくなるのです。ですから、羊飼いたちは大切な財産である羊を守るために、羊が迷い出ないように目を光らせ、もしも群れから離れてしまった場合は、それを探しに行くことがルーティーンの仕事となっていたのです。

ここで、そもそも羊とはどういう動物であるかを確認しておきましょう。羊とは家畜の中でももっとも従順な動物でありました。なぜなら、羊は活発な動物ではなくて、群れで行動することを好む家畜であります。一人で放っておかれると羊はストレスを抱くというのです。よって、自分たちを導いてくれる者が現れると、そのあとに群れを成してついてゆくことを好むといえます。ちなみに、モンゴルでは羊の先導役として山羊を一匹選び、羊の群れのリーダーにすることもあるといえます。山羊は、群れを成すよりも単独で行動することを好む動物だからです。羊の視野はとても広く、180 度を大きく超え、ときには 300 度に迫る広い角度を見ることができそうです。ただ視力は弱く、10 メートル先になるとよく見えません。そのような羊が群れを成すことができるのは、他の羊の体から発するにおい（体臭）をかぎ分け、においを頼りに群れることができるから、というのです。さらに、音を聞く力、聴力がとてもすぐれていて、自分たちの主人である羊飼いの声を他人の声と聞き分けることができるといえます。ヨハネ福音書 10 章に「羊はその声を知っているので、先頭に立っている人の後をついて行く」というみ言葉がありますが、まさにその言葉通り、声色で自分たちの主人を判別することができます。ちなみに、山羊と羊の違いはどこにあると思いますか。それは体質の違いです。羊は体の中に脂肪分が多く、また山羊よりも毛の量が多いため、寒さに強い動物であるということです。北海道に羊ヶ丘という観光地がありますが、北海道は本州よりも寒い地方ですよね。しかし、山羊は寒さが苦手な動物です。パレスチナもまた冬の夜はけっこうな寒さになります。羊は、そのような寒さに耐えることができます。また、体脂肪分が多いため、ユダヤ人は山羊ではなく羊を食べて、そこから脂肪分を摂取します。ほかに、羊の特徴はいくつかあります。羊は泳ぐことができません。また、後ずさりすることもできません。要するに、俊敏な動物ではないのです。だから、本日の話のように羊が群れから離れ迷い出るとは、自らの命を落としかねない危険な行為であり、何としても、元の群れに連れ戻さなければなりません。

そのようなアクシデントが起きたとき、今日のたとえで、羊飼いは他の九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を探しに行くことと書き記されています。そうすると、残された九十九匹もリーダーを失いバラバラになって迷い出た羊同様に命の危険にさらされることになりはしないか、と私などは心配します。しかし、ご安心ください。イエスの時代のパレスチナでは羊は個人のものではなく、村全体の所有物だったため、通常羊飼いと二人または三人が羊の世話をしました。ですから、おそらく九十九匹をほかの羊飼いに任せて、この人は迷い出た羊を探しに行くことができたのです。イエスは、このように迷い出た一匹の羊を探しに行くお方こそ、私たちが天の父と呼びかけている神さまなのだとされます。

ちなみに、本日のいなくなった羊のたとえはマタイ福音書だけでなく、ルカによる福音書 15 章にも登場いたします。ルカ福音書のほうは、無くした銀貨のたとえ、放蕩息子のたとえと並んで書き記されています。しかし、ルカのほうは、本日のマタイ福音書と違った文脈の中で描かれています。すなわち、ルカのたとえでは、話の最後が次の言葉で締められています。「このように、悔い改める一人の罪人については、悔改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも、大きな喜びが天にある」つまり、ルカ福音書に登場するこの一匹の羊は「罪人」であり、未だ救われていない人のことだと言われるのです。一方の本日のマタイ福音書では、この迷い出た羊は「もっとも小さい者の一人」であり、マタイ教団の教会のメンバーです。そのメンバー

が何らかの理由で群れから離れてしまう事件が起きる。そのような時は、教会のリーダーである牧師がその教会員のところに行って連れ戻す働きをしなければならないと、イエスは語っておられます。少し専門的な言い方をするならば、ルカ福音書のたとえ話は救済論的であり、マタイ福音書のほうは教会論的であるということができるとでしょう。

しかし、いずれにせよ聖書に描かれるこの二つのたとえにはいくつかの共通するメッセージがあります。第一は、神の愛は個人的である、ということです。私はかつて3人目の子どもを出産したお母さんからお話を聞いたことがあります。子どもを身ごもった当初は、経済的な面も含めて不安も抱いたそうです。しかし、3人目の女の子を出産された後、そのお母さんは言いました。「こうして、子どもを抱いていると不安などどこかに吹き飛んでしまいました。3人のわが子は、一人一人が大切であって、いなくてよい子どもなど一人もいません。3人目が与えられて本当に神さまに感謝しています」と。神さまの愛もこれと同じです。神さまは私たち一人一人の名を呼んで、かけがいのない固有な人格として扱ってくださいます。

私は一人の宣教師の方から、その方のそれまでの宣教活動の経験を伺う機会がありました。あるアジアの国で働いていた頃、その宣教師は、その国で刑務所伝道をされたことがあるとおっしゃっていました。いわば、監獄伝道です。その刑務所では、一年のうち何回か外部から宗教家などの人を招いて囚人たちの前で話しをしてもらい、彼らにその生き方や考え方を捉えなおす場を提供しているという。中に足を踏み入れてみて驚きました。その刑務所の囚人たちは、官吏から番号で呼ばれているというのです。その刑務所で話をする機会が与えられた時、彼は壇上から、次の言葉をもって聖書の話を始めました。「私は今日、皆さんのことを番号ではなく名前と呼んでくださる方をご紹介しますために、ここにやってまいりました」と。そうです。神さまは私たちを名前と呼んでくださるお方です。

二番目のメッセージ、それは神の愛は人をたずね求める愛である、ということです。羊飼いは羊が自分で戻ってくるまで、じっと座って待っていたのではありません。そうではなく、自分から出かけて行って羊を探すのです。助けを必要とする羊を探して、どこまでもゆくのです。私も牧師として遠いところに出かけた経験があります。前任教会で奉仕していた時、一人の教会員が軽井沢に引越し・転居され、軽井沢の地で暮らし始めるという例がありました。学校の先生をされていた方で、退職後は静かに地方で暮らしたいと考えられたからでした。ところが、しばらくしてご主人の具合が悪くなり、佐久市にある病院に入院されたというのです。その知らせを聞いて家内と車で、その佐久市の病院へお見舞いに行きました。私はその時、初めて千曲川をこの目で見たのです。別に長野県に観光に行ったわけではありません。しかし、これが島崎藤村の作品の舞台となった場所かと思うと、妙に感慨を覚えたことを覚えています。そのように、神さまは迷い出た人を捜し求めるお方です。

三番目のメッセージ、それは神の愛は忍耐強い愛である、ということです。羊は弱く愚かな動物であると言われていています。羊が危険な目に遭うのは羊飼いが悪いのではありません。自分が悪いのであって、ほかの誰のせいでもありません。しかし、私たちはこの過ちを犯す愚かな羊のことを「自分には関係ない他人事だ」と笑い飛ばすことはできません。大学時代に法学部の教授であった先生はクリスチャンの先生でした。私もその授業を受けております。その先生は、お父様も東大の英文学の教授として知られた方でした。ところが、その父親が先生の息子さん（つまり実の孫）の襲撃によって命を落とすという衝撃的な事件が起きたことを、私はテレビで知りました。深々と、カメラに向かって頭を下げるお姿を見て愕然としたことを覚えています。この世の地位や名誉、はなばなしい過去の経歴など関係ありません。人はだれしもが、心の中に闇を抱えているのではないのでしょうか。迷い出た羊とは、本当は私ども自身のことではないのでしょうか。私たちもまた、弱く愚かな存在であります。しかし、神さまはそのように弱く愚かな私ども人間を前にして、断罪して知らん顔をしたり、切り捨てたりはしません。いくら羊が愚かであっても、羊飼いがその羊を救うために命の危険を冒してでも谷底まで降りて行くように、神さまもまた私たちのところに降りてきてくださるのです。

そうして、最後です。神の愛は人間を強くする愛です。愛の中には人間を墮落させる愛、人間をダメにしてしまう愛があります。しかし、神の愛は人間を救い、立ち直らせる愛です。迷う者に知恵を与え、正しい道へと導く力が、聖書の神さまにはあります。弱いものを強める愛、罪の虜になった人を罪から救い出し、その罪を贖い、その人を聖なる者に造り変えてゆく力があるのです。私たちの教会の主であるイエス・キリストがそのような力を持つ、よき羊飼いであることを感謝し、そこから離れることがないよう、心掛けたいのであります。

お祈りいたします。